

書 評

程章燦『魏晉南北朝賦史』

江蘇古籍出版社 一九九二年二月 四三四頁

中國文學史に於て「辭賦」という文體は如何に位置づけられるのか。そもそも「辭賦」とは如何なる文體であるのか。ここ十數年來、質的にも量的にもその裾野を擴大しつつある辭賦研究であるが、そこにはこのような問題意識が共通して働いていると言えよう。

しかし、この一見基礎的でシンプルな問題の解明は、そう容易ではない。最も難關となっていることの一端を挙げるとすれば、それはこの文體が、紛うかたなき韻文である「詩」と各種各様の「文」との中間的要素を持つものであるが故の、境界の曖昧さ、である。見方を換えれば、辭賦についての検討には常に「詩」や「文」との相關への配慮の下に於てなされるべき素地があるのであり、その配慮が

十分行き届いた辭賦史研究には、それを通して文學史の縮圖を読みとることさえ可能であるに違いない。だからこそ、めざましい轉變を示す「詩」「文」の間で、辭賦自體は如何なる展開を遂げたのか、そのような周縁を絶えず顧慮しつつ一篇一篇それ自體が重厚な辭賦を解讀していく作業は、やはり容易ではないのである。しかし、本書はその困難を冒して、辭賦史上の最も充實した時期に於ける流變の輪郭を骨太くなぞって示すような一書となっている。

まず、著者の程章燦氏について。一九六三年福建省生まれ、北京大學歴史系を一九八三年に卒業後、南京大學中文系に進み、程千帆教授・周助初教授の指導の下、一九八九年、博士學位論文「魏晉南北朝賦史」を提出。これが本書の母體ともなっている。現在、南京大學古典文獻研究所副教授、少壯の研究者である。

本書の構成は、全部で八章と附録二篇から成り、巻頭に傅璇琮氏の序文が寄せられている。各章の標題をざっと追って見るだけでも、著者に於ける「魏晉南北朝賦史」の捉

え方は或る程度窺い知ることができる。目次は次の通り。

第一章「緒論」

第一節「中國文學中の石榴花」

第二節「詩人之賦與辭人之賦」

第三節「欲諷反勸…在力の平行四邊形中」

第二章「建安賦」

第一節「轉機…建安賦創作繁榮之因縁」

第二節「新姿…建安賦創作繁榮之現象」

第三節「斑斕的情感世界」

第四節「形式與體裁」

第三章「魏晉之際賦」

第一節「建安餘波及其流傳」

第二節「理性智慧の聲音」

第三節「傾斜天平の這一端…吳蜀賦」

第四章「兩晉賦(上)」

第一節「表現空間の拓展」

第二節「舞臺轉到南方」

第三節「優患の縮影」

書 評

第五章「兩晉賦(下)」

第一節「理論批評雙峰并峙」

第二節「語言・形式・結構」

第三節「《三都賦》…駢辭大賦最後の輝煌」

第六章「南朝賦(上)」

第一節「賦的貴族化傾向」

第二節「賦的唯美追求」

第三節「賦的詩化趨勢」

第七章「南朝賦(下)」

第一節「南朝賦的側面觀察」

第二節「南朝賦論(一)」

第三節「南朝賦論(二)…劉勰的賦論」

第八章「北朝賦」

第一節「概説」

第二節「北朝賦…三個視角」

第三節「入北南人賦作…合二而一」

第二章以下どの朝代の項目でも共通することだが、著者は朝代ごとに、それぞれの歴史的情況、すなわち政治・社會

情況といった外因との相關に於て詩文とりわけ辭賦の特徴的傾向を、各章の前半部分で（二章に互る場合は主に上章で）述べる。そして後半は、それらを通時的な觀點から兩漢辭賦確立以來の諸特徴の變遷として述づけ、或いはよりのを絞った文體的問題・文體の境界に關わる問題などの検討に紙幅を費やす。しかも、具體的な數量的資料については隨處で、程氏自ら作成したと覺しき詳細な附表を添えて、數量が質に及ぼす變化の立證・説明を怠らない。この附表の豊富さは本書の一つの特長であつて、單に讀者説得の上での效用だけではなく、著者によって啓發された問題に讀者が取り組むに當つては、有效な足がかりにもできるだろう。

また、論述の手順として、著者は全般に互つて、まず從前の研究成果に幅廣く目を通し、その中から自ら論點とすべきポイントを幾つか整理把握した上で、具體的な魏晉南北朝賦作品群の分析に即してそうした諸問題の所在を確認し検討していく、という形を採っている。その姿勢は、本書の「魏晉南北朝賦史」という、對象時期の絞りこみ方に既に表れている、と言つてよいだろう。第一に、先秦から

清末に至る約三千年の通史をめざした場合その作業に伴う利弊を判斷し、辭賦史上の最も重要な時期に限定した點。

第二に、時間的には連續する兩漢・魏晉南北朝の兩時期を一緒くたに扱わず、敢えて魏晉南北朝にのみ的を絞った點。その意圖について直接の説明はないが、第一章「緒論」がまるごと説明代わりになりそうである。中でも第四節「結束語」に於ける歷代辭賦研究の概括が、最もわかりやすい。程氏に據れば、まず近年の辭賦研究の活況の中で、一九八七年の馬積高『賦史』（上海古籍出版社）の出版が一つの大きな節目となる。『賦史』は、それこそすべり先秦から清末までを覆う辭賦通史であり、現在ほぼ唯一の辭賦通史でもある。辭賦研究の上にもたらした益は測り知れない。しかし、同書が通史たらんことをめざしたために、具體的な作品個々への分析が十分には示されずに終つた缺點についても程氏は指摘し、氏自身その反省に立つて、單なる概観ではない、より濃やかな作品分析にもとづいた辭賦史をめざした、という次第。一方また漢魏晉南北朝を對象とした研究を見渡せば、その蓄積自體は少なくない。陶秋英

『漢賦研究』（一九八六年・浙江古籍出版社）、龔克昌『漢賦研究』（一九八四年・山東文藝出版社）から大陸以外の地域での成果まで、質量ともに豊富である。しかし、兩漢辭賦から辿り始めた場合、「辭賦とはそもそも如何なる文體なのか」という起源についての考察を抜きに入るわけにはいかないし、その考察自體が相當に複雑で重要な、辭賦研究上の難題でさえある。これら先行文獻の中にもその苦勞は窺われる。勿論、辭賦の起源と成立過程に對する程氏なりの所見を放棄したわけではない（後述するように第一章がその證據である）ものの、本書ではその問題に正面から取り組み作業を敢えて差し控え、或る程度スタイルを確立して以降の辭賦を専らに検討する方針を採っている。そして評者の見るところ、そこには、詩の成長と文の精練とはさまで、辭賦はそれらとどのような關係を持ちつつ辭賦自體としてどのような展開したのか、という目配りが常に根底に働いているのである。ともかく、こうして魏晉南北朝にのみ的を絞ったことは、辭賦研究として非常に意義ある選擇であると思う。なお、程氏がここで「魏晉南北朝」とするの

は、後漢末建安年間から隋末まで、西曆では一九六〇年～一九九〇年に當る。

以下に、各朝代に於ける辭賦の動向の特長に關連して、辭賦史上の諸問題がそれぞれどう扱われているか、幾つか見ていきたい。

まず、第一章「緒論」に於ける兩漢辭賦史についての程氏なりの概括は、何よりもそれが「魏晉南北朝賦の十分な研究を行うため不可缺の前提」（二頁）という意圖を以って行われている。これは、魏晉南北朝賦の「先聲」として漢賦を溯り見ればそこに何が見出せるのか、という視點とも言えよう。ここでは、漢賦についての概觀を兼ねた辭賦研究史についての總括と言えそうなほど、廣汎に亙る先行文獻が頻繁に引用參考されている。一々例舉する餘裕はないが、目立つ傾向として、程千帆・周助初兩教授、同窓であり同僚である許結氏『漢代文學思想史』一九九〇年、の著者等の説を順當に承ける一方、先に紹介した通り、良くも悪くも本書執筆にとって教訓的存在である馬積高氏とその直

接の弟子である葉幼明氏『辭賦通論』一九九一年、の著者の説は反省材料としてフルに活用されている。その内容は、辭賦の起源と確立の過程・背景についてのまとめ(第一節)、建安以前の兩漢に於ける辭賦史展開の展望(第二節・第三節)から成る。あくまでも簡潔なこれら概括のうちにも、辭賦及び文學に對する著者の柔軟な史的考察の姿勢が窺われて面白いが、差し當って兩漢辭賦の展開中「漢賦二體」をめぐる論述部分が、本書全般を見通すためには有効と思われるので、それを予め押さえておくことにしよう。

漢賦を、その起源の別に應じて戰國諸子の辨論の要素を汲む大賦と、楚辭系の抒情寫志賦という二通りに分類するのは、今や辭賦研究上一般に定着していることだが、程氏はこれをそれぞれ「騁辭大賦」「抒情小賦」と呼んで、辭賦分類のための枠組として一應襲用した上で、司馬相如「子虛上林賦」班固「兩都賦」等に於ける騁辭的要素の退化と表現の多様化を以って「大賦的畸型的發展」(二七頁)とし、一方、賈誼「鵬鳥賦」から司馬相如「長門賦」劉歆「遂初賦」まで抒情賦の萌芽として注目される作品群に於ける楚

辭の抒情性の希薄化を以って「賦體寫志抒情傳統的淡化」(二九頁)とし、それぞれ枠組としての「二體」では割り切れない展開であることを説明。そしてこの點にこそ魏晉南北朝に於て關心を引く種々の辭賦傾向の「先聲」が開かれていることに、注意を促している。實際、魏晉南北朝を通じての「漢賦二體」の分立から合流への過程が、騁辭大賦・抒情小賦それぞれに於ける變化の事情によることは、第二章以降の朝代を追っての検討の上でも追ひ追ひ説明されていくことになるのだが、この一段はまさにその「緒論」に當るのである。さて、こうして本書の重點チェックポイントとして逐次追跡されることになる「二體」が、とりわけ大規模に検討されるのは、兩晉賦の展開の中に於てである。「漢賦二體」の一つ騁辭大賦系賦が、左思「三都賦」を代表例として、兩晉に於て兩漢以來の空前の盛況を見せ、しかも以後ほとんど作られなくなったことは、周知の通りであり、この大賦系賦の消息をはじめ「漢賦二體」流變の一つの節目をなす兩晉賦を解明するのは、辭賦史研究上の大きな課題と言ってよいだろう。程氏は、兩晉に於けるこ

の問題について、「三都賦」など大賦系賦を軸として多角的な考察を、第五章第二・三節に於て示しており、啓發される點が少なくない。要點はほぼ三つである。

一、「漢賦二體」をめぐる視點から見た兩晉大賦の動向（二七九頁）

二、京殿苑獵系大賦衰退の背景三種（一九〇頁）

三、辭賦創作に對する賦家の自覺の顯在化（一八一頁）

どの問題についても、前半部分で詳論されている政治・社會情況からの密接な影響面を前提としての考察であることは改めて言うまでもない。上述の通り、「漢賦二體」の流變をそれぞれの型内部に生じた變化によって述べようとする程氏は、兩晉に於ける騁辭大賦系賦の實際を次のように捉える。すなわち、騁辭大賦系賦は「三都賦」に見られる如く、例えば首都の封域・沿革・宮殿・物産・人才等難多な題材についての網羅的描寫を極限まで擴大し詰めた結果、遂には題材ごとに相當大がかりな段落を占めるまでになった。他方、大賦の一部を構成する要素にもなる内容を專題とした小品賦の存在が増えたことに注目して、程氏は

これを、大賦の部品ごとの分散獨立化^{II}體物小賦への接近融合、の現象と考える。これに伴い總合體としての騁辭大賦の在り方は崩れ去り、漢魏からこの晉に至って、まず騁辭大賦系賦の側に於て「漢賦二體」の截然たる枠組は淘汰された、というわけである。因みに、騷體抒情小賦については、兩晉期の動きとして、『楚辭』中の字句を引用して標題とするなど「改創新題」（二七四頁）が始まり、題に於ても内容に於ても五言詩との近似を強めたことを指摘、これに本づいて漢魏までの『楚辭』舊題をそのまま襲用する標題傳統を脱し、いよいよ五言詩・文と同様の「向唯美化傾向」に合流した、と見る。さらなる變化の迹は、南朝賦に於て「介于詩賦之間的騷體賦」（二四二頁）として検討されている（後述参照）。また二は、一と密接に關連した問題でもある。程氏は、まず「三都賦」を例にとって兩漢京殿大賦との差異、殊に駢體化傾向を指摘。そして京殿大賦衰退について文化史的背景・社會的背景・大賦自體の性格、の三點から説明する。すなわち、大賦が從來「類書」の代替的效用を備えていたことに着目、しかし兩晉以降の類書

増加という變化の下で、百科辭書的な大賦の必要がなくなつた。これが、文化史的背景。また晉を最後に、都城・宮殿などに賛美を盡くすべきほどの國家的安泰を喪失、京殿大賦製作のための基本的契機が失われた、これが社會的背景。さらに、「三都賦」が「十年構思」と傳えられるほどの時間と精力を費やして班固「兩都賦」張衡「二京賦」以上の精密をめざしながらも、終に疎漏を免れなかったことを例にとつて、構想・規模に於て常に前作を上回ることが求められる騁辭大賦系賦自體の性格が、存續の限界を招く結果となつた、これが騁辭大賦自體に備わる衰退の原因、とする。この邊り「三都賦」を材料として展開するが、賦の内容の具體的分析に據る結論と言うよりは、むしろ「三都賦」をめぐる歴代賦論・賦話・研究史の集成と交通整理、といった觀がある。

三「敘述結構」に對する自覺と重視の傾向の指摘は、「三都賦」及び潘岳「西征賦」に於ける表現時空間の擴大の分析に本づく。特に「西征賦」の文學的價值がその畫期的な「敘述結構」に與かることを舉げている一節（一八三頁）は、

簡潔にして要領を押さえたものである。他に「敘述結構」に對する晉代賦家の自覺と重視の一環として、兩晉以降、賦序の正文からの分離傾向、増加、増量、多目的化、の四點に着目しているが、同時に、辭賦以外の詩序、詞序などを併せて一つの文體としての「序」の特性ということに言及しているのも、興味深い問題提起の一つと言えよう。

この一例でも明らかのように、本書には、辭賦史上で注視される事項の多くについて、魏晉南北朝のうちそれが最も顯在化した時期に振り當てて検討する方針が窺われる。例えば、建安期では、建安賦の楚辭的傳統回歸及び題材擴大の現象について、次の魏晉之際では、玄學流行の賦作に於ける反映について、それぞれ最も重點的に論じており、そして兩晉期では、大賦の展開を中心とした「漢賦二體」の流變について重點を置くこと既に見てきた通りである。そうして見ていくと、第六・七章「南朝賦」で言及される事項は特に多様で、辭賦史に於てこの時期が荷なう重要さを改めて認識させられる。こんなに問題は山積していたのか、という感じである。この時期には、辭賦そのものに内

在する問題よりもいっそう、詩を主とする周縁分野との相關に於て考察する必要がある諸傾向が續々現れてくる。程氏の言及するものをざっと挙げれば、以下の通り。

一、「駢賦」の登場（二一九頁）

二、辭賦中の亂辭に代わって定着した系詩と五言詩・七

言詩との比較（二三三頁）

三、「詩賦合一の軌跡」―詩賦同題と、詩・賦の間に介在する騷體の賦（二四二頁）

四、文體の賦化と賦化した文體（二五九頁）

五、佛教思想の、辭賦に於ける反映（二五五頁）

六、賦集編纂と賦論―『文選』・『文心雕龍』（二六三頁）

少々補足してみると、一、駢儷體という、極度に技巧的な南北朝期文學を象徵すると言ってもよい獨特のリズムと辭賦の結びつきが強固に現れ、二、辭賦の成立以來の問題である詩との近接關係に、系詩の存在が新たな側面をもたらし、三、詩と辭賦とが同じ題目で製作されることが増えるなど、詩・賦の間にいっそうの接近が認められ、四、駢體賦の出現とも大いに係わるが詩との接近の一方で議論文と

同等の内容を表す賦も増えた、五、佛教思想流入を反映する賦が出現、そして六、辭賦史の蓄積を反映する現象として「賦集」が編まれるようになり、また眞に理論的な「賦論」が出て、きちんと辭賦に關する理論が確認できるようになった。どれを採っても一つ一つが辭賦史上のトピックであると同時に問題發現でもある。

ところで、この中でも六、賦論の問題は、劉勰『文心雕龍』による辭賦についての理論的發言自體は、確かに南北朝期に屬する特記事項に違いないが、他方、本書各代記述を通じて繼續的に追跡されてきている數少ない――それだけに重要な――ポイントの一つでもある。程氏の所謂「賦論」とは、辭賦についての文體論・創作論としての理論である。しかし、實際本書の中では南朝以前から、言わば辭賦製作に關する士大夫の自覺の深まりを窺う緒として、朝代ごとに賦論の成長の過程に注目した段落が設けられている。例えば、建安期、曹丕「典論論文」曹植「與楊德祖書」などの辭賦に絡む評論が、作家作品についての評論という形に終始する限界を認めた上で、それを批評及び賦論の萌芽と位

置づけるし、兩晉期に於ては、賦論らしい賦論の展開という點で陸機・潘岳など「體物瀏亮」派と、左思・皇甫謐・摯虞など「諷諫徵實」派との、二派分立狀況として捉えてゐる。そこで陸機の「文賦」を「體物瀏亮」派賦論の根據として中心的に扱うのは當然としても、それ以外にも、各種賦の本文・序など實際の作品の中からも多くの「賦論」を抽出して考察に組込んでゐるのが、目を引く。出來合いの「賦論」にあぐらをかくことなく、さらに多様な本文解讀の中に材料を求めれば、有用な資料は決して乏しくないことを、教えられる。この賦論に關する記述に限らず、このような粘り強い姿勢は本書の中で隨處に見出される。こういう積み重ねができるのは、史的考察の書ゆえの利點であらう。

さらに、北朝賦史についての比較的詳細な記述も、本書の特長の一つである。南朝重視に偏りがちな從來の魏晉南北朝文學史の態度を改める動きが、いつ頃から起きたのか定かではないが、例えば曹道衡・沈玉成編『南北朝文學史』（一九九一年・人民文學出版社）では北朝文學史の記述にかな

りの紙幅を充てるなど、北朝文學を正當に評價しようとの意識が現在擴大しつつあることは確かであり、本書もその一角に數えてよさそうである。北朝に屬する文人の出身地とその賦篇、掲載箇所、存佚などが表で一覽できるのは有り難い。さらに所謂「入北南人」庾信や王褒らの北朝期に於ける活動は、元來注目されている事柄でもあるが、程氏による彼らの在北期移轉のルートと作品群の一覽表は、個々複雑なそれらの情況を一度に把握するのに便利である。

無論、單に附表が勞作であるばかりではなく、ともすれば亡國悲哀の運命を強調しその作品についても情緒的説明に終始しがちな「入北南人」賦について、亡國の歴史背景を考慮に入れながらも、他の朝代の辭賦分析に用いたと同様の、創作論的視點からの検討に努めてゐるのも、本書全體のバランスに適っている。

最後に、氣になったことを少々記したい。例えば、「賦家」という呼稱の問題。これは、單に辭賦を製作する者或いは製作し得る者、という程度の緩い含意しか持たない稱

で、その指す範圍はほぼ文筆を執る者、士大夫、と同義のものではないか。賦家とは即ち士大夫であり詩人でもあるはずである。ところが本書で、時に「繁欽是建安賦家兼詩人」(八三頁)と「賦家」「詩人」をあたかも別々の専門家が存在するかの様に列舉している場合が認められる。文の勢いの止むを得ないところではあろうけれど、誤解を招きやすい。もう一つある。本書を読みつつ「漢賦」に的を絞った辭賦史として、一九八九年に出た萬光治『漢賦通論』(巴蜀書社)のことがしばしば念頭に浮かんだ。辭賦の形成過程と兩漢辭賦の在り方をめぐって史的な迹づけを行っている同書は、在來の研究史・辭賦作品全體への目配りのしかたなどで、本書と共通する點が少なくない。時期的に見て、程氏にもこの著作の閲讀は可能であったはずと思うが、卷末の引用參考書目に一切見當らないのは、どうしてだろうか。疑問である。

以上、この一書では、魏晉南北朝期の辭賦の流變について從來の研究史を浚ってそれらを見通しよく整理するとと

書評

もに、今後重點的に検討していくべき辭賦史上の諸問題を忌憚なく明瞭に提示されている。もし、文學史に對して、企畫書・見積書としての「文學史」とでも言うべき見方が可能なら、本書はその好例に當るだろう。一般に、論文・著作とその著者の著述時年齢との關係を一々取り立てても大して意味はないかも知れないが、本書には少壯の研究者の出發點に於ける著述ならでは、構想なり見通しなりが忌憚なく盛り込まれていて、さしずめそれは企畫書・見積書としての「文學史」とでも呼ぶのがふさわしい。小文では、程氏による辭賦史展望を紹介しつつ、そこで提起されている辭賦史上の諸問題を些か拾い集めることを心がけたつもりであるが、原書の氣迫を伝えるに遠く及ばない評者の未熟な點は、枉げて諒とされたい。

(京都大學 原田直枝)